

在日として生きることの葛藤

金紗羅

「自分は周りの子とは違う」ということを知ったのは6歳の頃だった。

日本に住む外国人の中でも在日コリアンと言われる存在である私は、幼少期には日本のとある保育園に通っていた。当時は「パパ」「ママ」ではなく、「アッパ」「オンマ」と言っていたり、親戚などに会った時の挨拶が「こんにちは」ではなく「アンニョンハシムニカ」と言っていたりなど、他のみんなとの違いを若干感じる程度だった。

でも「みんなと同じ小学校には行かないよ」と言われた時の衝撃とショックな気持ちは今でも覚えている。その時はただみんなと離れてしまうのが悲しかったというのが大きかったが、幼いながら私にとっての居場所であった保育園の中で、みんなとの「違い」を感じていたのも事実である。

それでも脈絡もなく在日としてのアイデンティティが現れた訳ではなく、自分が在日であることを自覚し、位置づけることは自然な流れだった気がする。

在日の中にも様々な在日の形があるのも事実で、時代の流れや取り巻く状況によって、在日のアイデンティティが固定されたステレオタイプなものから、多様なものへと変化している。

在日の中でも「違い」が生まれ、時にはそれが自身と日本人以上に遠いものと感じる場合もある。

在日は「違い」を感じる場面が多いのではないか。良くも悪くもそのように感じる状況が多くあり、私自身の内的葛藤の一つだ。

また、自身の存在証明の問題も数ある葛藤の中の一つで、在日コリアンは日本に属せなければ、本国の方にも属せないからこそ、社会でも不安定な位置付けであり、自身の存在証明は大きな問題であると感じる。日本にいる日本人が「日本人」であることを定義する必要がないが、在日はこれを避けては通れない。日本に対しても本国に対しても完全な所属を主張できず、「国籍」や「血の純潔」では定義できない在日コリアンという存在である以上、今後この葛藤と共に生きていくしかない。それでもその葛藤と向き合って初めて、人間らしく生きていることになると思う。

今後長き人生の中で、これら2つを含む葛藤と出来るだけ向き合い、それらを共有できる仲間や、自分と価値観や考えが違う人とも意見を交わし、向き合うことを大切にしようと思う。